

## コリント人への手紙第一 9 章 13-23 節 「何とかして救うため」

小池 宏明 牧師

今日の箇所でも、パウロは使徒である自分たちの権利を明らかにしている。それは、8 章で取り上げられている自分の知識を誇り権利に固執する信徒たちを戒めるためだった。ところが、パウロ本人は、使徒としての当然の権利を一切用いなかった。なぜなら、福音を伝えることがキリストから託された使命であり義務であるからだ。それは、報酬があろうが無かろうがどうしてもなさなければならない務めであった。15-18 節には、福音宣教のためにすべてをささげ尽くして生きるパウロの覚悟が、はっきりと証言されている。

### **\*福音を伝える相手と同じように**

また、パウロは、何とかして、幾人かでも救うために、最大限の努力をしていることを証言した。(19-23 節) 19 節「私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷になりました。」パウロは自分の自由意志で、他人の奴隷になる道を選んだ。そして、ユダヤ人にはユダヤ人のように、異邦人には異邦人のように、弱い人々には弱い者になった。彼らを救うためである。この姿は、大牧者イエス・キリストご自身が示してこられた。ピリピ人への手紙 2 章 6-8 節のとおり。「2:6 キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、2:7 ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、2:8 自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。」同じように、私たちもイエス様につながっていて、イエス様に遣わされていることを自覚しているならば、自ら隣り人を愛するようになり、その土地に溶け込むように努めるだろう。しかし、それは単にこの世の人々のように生きることが目的ではなく、人々が、救い主イエス様がおられることを知るようになるためである。

### **\*私たちも派遣されている**

私たちも、遠く極東と呼ばれる所まで宣教師たちが遣わされてきたので、救われるチャンスを得た。私たちの周りには福音を知らない人々が、たくさん住んでいる。私たちは、ここから、そのような人々の元に派遣されて行くのだ。イエス様ご自身が、神の御子であられるのに、人として生まれ、共に生き、へりくだって下さった。パウロは自らの権利を捨てて、自己犠牲の愛を模範として示した。私は何を放棄して、何を捨てて、隣り人を愛するように求められているだろうか。祈り求めよう。